緋弾のアリア～呪われた眼を持つ者～

クロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～呪われた眼を持つ者～

【Ｎコード】
Ｎ１９７６Ｚ

【作者名】
クロス

【あらすじ】
呪われた眼　複写眼をもつ主人公、海山玄武はキンジと共に武偵、神崎・Ｈ・アリアに出会ってしまい、色々と面倒ごとに突っ込むようになったしまった。
週に３話あげれたらいいほうです。

今日の天気は晴れ時々少女（前書き）

初投稿のクロスです。初めて何でめちゃくちゃだと思いますが気長い眼で見てくださいｍ（__）ｍ

主人公紹介

名前：海山玄武ーカイザンゲンブー

学科：探偵科　　Ｓランク

武器：トカレフＴＴ－３３　３丁どれも改造銃
　刀　３本（月光、朱雀、陽炎）
　　カゲロウ
　太刀　１本　霧幻
　　ムゲン
　ナイフ　２本
　ワイヤーつき投げナイフ　１０本

身長：１７２？　　体重：５５？

　アルファ・スティグマ

能力：複写眼……・この眼の保持者は超能力の発動を一度見ると能力の構造を読み取り、自分のものにできる。（相手の発動してる能力を消すこともできる）
　・限られた時間でしか使えない（現在は５分）
　・時間ギリギリまで使うと、次の日全身が筋肉痛で動けなくなる

・精神的に重いダメージを負うと眼が暴走し、回まわりを破壊し尽くす

→呪われていると言われる理由

容姿

黒髪に不知火級のイケメン普段は黒い眼

今日の天気は晴れ時々少女

第一弾　　今日の天気は晴れ時々少女

空から女の子が降ってくると思うか？

多分、嬉しいなぁとか言うやつがいるかもしれんが実際に全く嬉しくない。

カイザンゲンブ

少なくともそれを体験した遠山キンジと俺こと海山玄武はそうは思わないだろう。それをきっかけに人生は激変したのだから・・・

ピン、ポーン

慎ましいドアチャイムの音で俺たちは目が覚める。

どうやらキンジはベッドでトランクス一丁寝ていて俺はソファーで制服で寝ていたらしい

（つーか誰だよ七時なんて朝っぱらから）

「キンジ、まだ寝るから出てくれ」

キンジが服を着てる途中に言った

「寝るなそしてゲンお前が出ろ」ゲンってのは俺の呼び名だ

「嫌だ！俺のエネルギー源は睡眠時間だ！よって俺は寝る」

キンジがため息をついて玄関に行った。なんだ行くんじゃん

「絶対起こさないで放置しといてやる」

「ひどっ」
そして俺は眠りについた。
俺はそのとき二度寝したことを一生後悔するであろうそのせいであの武偵　神崎・Ｈ・アリア　に出会ってしまうのだから

約一時間後

「キンジ、何で起こしてくれないんだよ」
「いや、起こさないって言ってたし一回起こそうとしたよ」
「一回だけじゃなく何度も起こせよ。つーかなぜ二度寝してないお前も遅刻しそうになってんだよ」
「メールチェックしてたらゲンが起きて時間にきずいたんだよ」

ちなみに俺とキンジはチャリで走行中だ。

「そのチャリ二台には爆弾が仕掛けてありやがります」
「キンジ、変なこと言うなよ」
「ゲンおれじゃないぞ」
「そりゃそうだろ後ろからきこえるし」
「だったら言うなよ」
「チャリを降りやがったり減速させやがると爆発しやがります」
「キンジ、と、とりあえず連絡を・・・「助けを求めてはいけません。ケータイをしよう使用した場合も爆発しやがります」ですよね〜」
「何のイタズラだっ！」

（正直俺一人だったら楽に潰せるのに通常モードのキンジが一緒じゃあ下手に動けないなぁ、せめてキンジがあれになっていたら楽だったのに・・・この状況どうしようか）

あれ、女子寮の屋上になにかいるぞ。って飛び降りやがった

「バッ、バカ！来るな！この自転車には爆弾がー」
「クソッ、キンジ二度寝せずに今日の天気予報ちゃんと見ればよかった女の子が降ってくるとは思わなかったよ」
「ゲン、ふざけたことといってる場合かよ」
「ほらそこのバカ二人！さっさと頭を下げなさいよ！」
「「へっ？」」キンジと俺があわせていうと
バリバリバリバリッ！
俺たちが頭を下げるより早く、問答無用でセグウェイを銃撃した！
（射撃うまいなぁ、つーかあんなの東京武偵校にいたか？って、あれ？こっちに向かってきてるし）
「く、来るなって言ってんだろ！この自転車には爆薬が仕掛けられている！減速すると爆発するんだ！お、お前も巻き込まれるぞ！」
「キンジの言う通りだこっちに来るな」俺とキンジは慌てていった
「ーーバカっ！」
女の子はそう言うと俺たちのちょうど真ん中あたりの上に陣取った
そして・・・・げしっ！俺たちの脳天を力一杯踏みつけてとんだ。
じみに痛い
そして女の子はこっちに向けて鋭くUターンしてーーぶらん。
逆さづりでこっちに飛んでくる
「「マジかよ・・・・・！」」キンジと俺は青くなっていた。すると少女は俺たちを抱いてそのまま空へいく少しすると
ドガアアアアアアアアアンッッッ！！！
爆弾が爆破した。あぶねぇあと少しで死んでたな。あ～あ、あのチャリ高かったのに

そのままパラグライダーは体育倉庫に突っ込み俺は途中ではなされ壁に頭をぶつけてしまって俺の意識は少しとんだ。
「痛ッ、武付け所悪かったか。あれ、キンジはどこだそしてここは・・・体育倉庫か」少しキンジを探していると

俺は見てしまったキンジが女の子と跳び箱の中にいるところを、だから俺は気づかれないようにすぐに隠れいつも携帯している2つのデジカメで気づかれずに撮った。
（これは面白い写真がとれたぞ。これは使えるぞ主に脅しに）

するとキンジがこちらに気づいた
「ゲンいっておくが俺は何もしてないぞ」
「その娘の服あげといてよく言うよ。まあそれを判断するのはこの写真を見た人だけど」
俺がニヤニヤしながら片方のデジカメをキンジに見せてやった。
「なっ、その写真消せ！」
「で、キンジこの写真いくらで買う？」まあ片方なくなってももう片方があるから損はないな
「いくらで売ってくれるんだよ」
「今度飯おごってくれたらいいよ」
「交渉成立でいいぞ。早く消せ」よしこれで一食分食費が減ったな
そして俺がデータを消すと
「・・・・へ・・・・・へ・・・・・」
「ーーーー？」
「変態ーーーーー」
「さっ、ささささっ、サイッテー！！」
（お、やっと起きたかケータイで録音しておこう）俺は跳び箱の横に行った
「このチカン！恩知らず！人でなし！」キンジがかなり責められてる

「ち、違う！こ、これは、俺が、やったんじゃ、な！」
キンジがちょうどな！といったときにセグウェイが１４台見えた
「うッ、まだいたのね」少女・・・神崎が言った
するとセグウェイが銃撃してきたから俺は防弾跳び箱の後ろに行った。そして俺の愛銃改造したトカレフＴＴ－３３を一つホルスターから抜いてマガジンのチェックをした。チェックしてる途中に
「あんた達もほら！戦いなさい！仮にも武偵校の生徒でしょう」
「むッ、ムリだって！どうすりゃいいんだよ！」
「俺は準備中だ」
「これじゃあ火力負けする！向こうは１４台いるわ！」
ズガガガッ！ガキンッ！
神崎が弾切れを起こしたようだ
「やったか」あれ、キンジの声が変わってる。
「射程圏外に追い払っただけよ。ヤツら、並木の向こうに隠れたけど……きっとまたくるわ」
「強い子だ。それだけでも上出来だよ」やっぱりなったのかよ
「ご褒美に少しだけお姫様にしてあげよう」ほんとキンジはあとで後悔するくせによく言うよな

（よし、準備が整った）俺が行こうとすると跳び箱の中から神崎をお姫様だっこして鋭い眼になったキンジが出てきた
「キンジそのモードになったんだから目標は一人7台な」神崎をおろしたキンジにそう言いながら俺は能力も使うため呪われた眼
複写眼　　を解放した。その瞬間俺の眼に朱色の五亡星浮かんだ
アルファ・スティグマ
「ゲン、右の7台は任せた。俺は左のを叩く」
「わかった」そういって跳び箱の後ろから出て行った

今日の天気は晴れ時々少女（後書き）

複写眼は『伝説の勇者の伝説』からいただき、能力も少し足しました。（悪いのを）

ここが変だというところがたくさんあると思いますのであったら感想で教えてくださいｍ（＿＿）ｍ

3分どころか1分もかからない４０秒クッキング（前書き）

主人公のキャラが安定していません十話くらいしたら安定すると思います

3分どころか1分もかからない４０秒クッキング

第２弾　　３分どころか１分もかからない４０秒クッキング

俺が跳び箱の後ろから出た。セグウェイ7台の方へ走ると「あ、危ない！」とか「アリアが撃たれるよ
りずっといいさ」とか聞こえたが無視し、愛銃トカレフＴＴ－３３
（以後トカレフ）で自分に当たりそうな銃
弾だけを全弾を使って撃ち落とし、予備のマガジンを持ってきてな
かったからホルスターにトカレフ
を収めて腰から　月光、朱雀、陽炎　の三刀を抜き二刀一刀をする。
ここまでの動作１５秒

ダブルエッジアンドエッジ

そして刀に複写眼の能力で風を纏わせ刀身延長し、３台のセグウェ
イを真っ二つに切った。ここまで３０秒、そのあと面倒になり投げ
ナイフ４つを４つのセグウェイのＵＳＩの銃口に思いきり投げるそ
れまでに飛んでくる銃弾は全て燃やし尽くした。

投げた全て投げナイフが残りのＵＳＩの銃口を貫き壊れた。この時
ちょうど４０秒そのあと複写眼を解除し、三刀も腰に収めて

「キンジ、こっちはやっと終わったぞってあれ？」何か神崎と口論
してるみたいだぞ

「……悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。
……しかし凄いよ、アリアちゃんはーー」バギュンバギュン！

「あ　た　し　は　高　２　だ！！」

「そこのあんた助けたんだから強制猥褻の現行犯逮捕するのを手伝いなさい！」俺の方を睨みながら言ってきた。助けてやったってその後セグウェイ破壊してやったじゃないか

「面倒だから嫌だ」

「そう、あんたもグルだったってわけね」なぜそうなる！？

「そこにいなさい。こいつを逮捕した後に逮捕してあげる」

どうせ今のキンジに勝てないだろう

すると案の定、神崎をこかしてキンジがこちらに来た。「逃げるぞ」とキンジに言われ一緒にこの場から逃げていった。

「あんた達逃げるんじゃない！！あんた達二人ともでっかい風穴あけてやるんだからぁ」なぜ俺にまで被害が

これが鬼武偵　神崎・H・アリアと俺たちの出会いだった。思い返せばこの出会いが俺を不幸にしてしまったんだろう。

始業式後

「はぁ、複写眼を使ったあとはとても疲れるなあ」ため息をつきながら俺が言うと

「別に疲れるだけだったらいいだろ。俺はヒステリアモードのせいで精神的にも疲れた。」

「まあ強猥犯のおかげでセグウェイは破壊出来たんだからいいじゃないか」

「だから強猥なんてしてねえ。ゲンも半分破壊ししただろ。あの写真ちゃんと消したんだろうな？」

「ああ、このデジカメから消しておいたよ。ちゃんと奢れよ」デジカメを見せてやる。

「ちゃんと消せてるな。よかった」まあもう片方にあるんだけどね

そして俺たちはクラス分けで分けられた2年A組に入り、少し話していると担任が入ってきてそれぞれ席に戻った。
俺は担任が転校生がどうとか言っているのを聞き流しつつキンジに何を奢ってもらうかを考えていると

「先生、あたしあの二人の間に座りたい」

何か聞き覚えのある声がしたな前を向くと指でキンジと俺を指す朝に会った神崎がいた。

「よかったなキンジ、ゲンお前らにも春が来たようだぞ。二人で転校生を奪い合え。先生！俺転校生と席変わりますよ」おいいいいぃぃぃ武藤てめー命を枯らす冬を呼び込むなぁぁぁ

「最近の女子高生は積極的ね、武藤君変わってあげて」先生も承諾するなぁぁそして拍手なんてしないでくれえええぇぇ

「先生！あんなチビの隣なんて嫌です！！」俺が神崎を指差して言うと

「あんたに決定権はない！」り、理不尽だあぁぁぁぁ

「キンジ、これさっきのベルト」神崎がキンジにベルトを投げてキンジがキャッチすると

「理子わかった！わかっちゃた！ーーーこれフラグばっきばきに立ってるよ」理子ナイス教室の皆も盛り上がってきたぞ

「先生、俺、キンジと神崎の愛を邪魔なんてしたくないんでーーーー俺がいってる途中に神崎がガバメントを抜き

ずぎゅんずぎゅん！壁に撃った。そして教室は静まりかえり

「れ、恋愛なんてくだらない！そんな馬鹿なこと言うやつにはーーーー風穴を開けるわよ」神崎が顔を真っ赤にしていった

神様助けてえええええぇぇぇぇぇ心のなかで俺は絶叫した。

奴隷制度復活のお知らせ（前書き）

やはりキャラが安定してない

奴隷制度復活のお知らせ

第3弾　奴隷制度復活のお知らせ

あの後俺は「キンジにとられたな」とか色々言われるのを我慢して屋上に逃げこむと聞き覚えのあるアニメ声がした。俺はとっさに隠れて盗聴させてもらった。

「ねぇ、遠山キンジと海山玄武ってどんな武偵？」

何！？俺たちのことを探っているのかよ

「遠山君は昔は強襲科のSランクですごかったよ。で海山君は今は探偵科だけをやってるけど1年の頃はSSR以外の学科全てしてて人間離れしていたよ」

おい、俺は一応人間だぞ人間離れなとこなんてこの眼ぐらいだぞ！

ま、この眼は知らないんだろうからこの眼なしで人間離れだと言われてるんだろうな……ひどすぎる

「キンジはやっぱりSランクだったのね。ゲンの方はSSR以外と言うところだけが疑問ね」

ヤバい、このままじゃあ複写眼の秘密が知られる！しかもこっちに向かってくるぞ戻るか

「待ちなさい」え、マジかよ気づいてたのかよ……逃げるか

俺はとっさに走って逃げていくと

「待ちなさいって言ってるでしょ」

神崎がおってきた。だが俺は止まらずに走った。しばらくしてまくことができた。

学校が終わりキンジと部屋に戻って俺はトカレフの整備をしていると、キンジはソファーに座って考え事をしていた。おそらく今朝の武偵殺しの模倣犯のことだろう

「なあゲンあの爆弾は俺たちを狙ったのかそれとも無差別だったのかどっちだと思う？」

「さあ、俺にはわからないな。そもそもあれは模倣犯だったのか本物だったのかが気になる」

ピンポーン

「武偵殺しはつかまったんじゃなかったのか？」インターホンは無視するのか

ピンポンピンポーン

「捕まったがあれは本当の武偵殺しじゃなかったとか？」俺も無視した

ピポピポピポピポピポピンポーン

「ああうるさいな！」とうとうキンジが諦めた

「誰だよ？」本当に誰だろう星伽だったらこんなに押さないだろーし……

「おそい！あたしがチャイムをならしたら5秒以内に出ること！」こ…このアニメ声はまさか…俺がトカレフをおいて見てみると

「「か、神崎！？」」俺とキンジはハモっていった

「二人ともアリアでいいわよ」いやいやそんなんじゃくてここ男子寮……

「お、おい！」キンジが止めようとしたがかわされた

「まて！勝手にはいるな！」俺が言うと

「トランクを中に運んどきなさい！ねえ、トイレどこ？」アリアがキンジに向かっていった

キンジが答えるより早くトイレを見つけて入っていった

キンジがトランクを玄関にいれている途中にアリアが出てきて

「あんた達ここ二人部屋なの？」いったあと中まで入ってきやがった

「まあいいわ」何がいいんだよ

そしてひらりと回り俺たちの方を向いていった

「キンジ、ゲン。あんた達、あたしのドレイになりなさい！」

……俺とキンジは絶句していた。

あれ？日本って奴隷制度復活してたっけ？ていうか神様　助けてええええぇぇぇぇ

ドレイ＝パーティーの一員でした（前書き）

最近受験生なのに睡眠時間と勉強時間を潰して書いてるからかなりヤバい。この調子だと高専に入れない……まあ勉強何てするきなかったからいいけど

ドレイ＝パーティーの一員でした

第４弾　　ドレイ＝パーティーの一員でした

「ほら！さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！無礼なヤツね！」

いやいや、いきなり来てドレイになりなさい！とか言ったヤツには無礼とかさすがに言われたくないよ。

「コーヒー、エスプレッソ、ルンゴ、ドッピオ！砂糖はカンナ１分以内！」そんなのここにあるわけないだろ

キンジがインスタントコーヒーを持っていった。そこで俺はトイレに行った。そしてトイレから出てきてすぐに

「おなかすいた」とか言いやがった

「何か食べ物はないの？」聞かれたから俺は

「ない」と言ってやった。

「普段どうしてんのよ？」コンビニで買ってるとキンジが言ってじゃあ行きましょうとかになってコンビニに行くことになった。そしてコンビニから帰ってきてキンジが

「ていうかドレイってどういうことだよ」とか言った

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活

動をするの」

「嫌だ。なんで強襲科に戻らなきゃならないんだ？」俺が言うと

「あんたのその眼の秘密をばらされたくなかったら従いなさい」

おかしいな複写眼のことは表から消されてるはずなんだけどな。ってことはブラフか

「ゲンの眼の秘密？」なんだかキンジは興味を示してるようだ。

「その眼になったら、いろんな種類の超能力が使えるのよ。実際その眼になってから超能力を使ってたし、そして１年の頃はＳＳＲ以外の学科全てをとっていた。それはもう超能力はかなりの種類使えるってことよ」

何か色々違うこともあったけどまあ大体あってるな。実際複写眼になったら色々使えるし。まぁあのときだけの推測だったらできてる方だな。

「おおよくわかったな。良くできました」これ以上調べられてもしばれたら嫌だから適当にいっておいた

「で、キンジは強襲科に戻るのか？」話を変えてキンジに聞いてみた

「何言ってるんだ。俺は強襲科が嫌だったから一番まともな探偵科に転科したんだぞ。ムリだ」

そういうことはわかってたよ。キンジが強襲科に戻ることなんてもうありえない。俺ももう強襲科に行きたくない

「あたしには嫌いな言葉が３つあるわ」

「人のはなし聞けよ」

「『無理』『疲れた』『面倒くさい』この３つは人間の可能性を押し止めるよくない言葉。私の前で二度と使わないで」あ、この３つ全部俺のよく言う言葉だ。

「キンジとゲンは私と同じフロントがいいわ」

どうせやるならフロントじゃなくてセンターがいいんだけどな

「よくない。なんで俺なんだ」

「太陽はなぜ昇る？月はなぜ輝く？」キンジいいかんげんにアリアとの会話が成立しないのを理解しろよ

「キンジは質問ばっかで子供みたい。仮にも武偵なら少しはゲンを見習って考えなさい」

キンジも子供みたいな容姿のアリアには言われたくないだろ。

もう俺はどうでもよくなったからアリアはキンジに任せてトカレフの整備を再開した

「とにかく帰れ。」「そのうちね」「そのうちっていつだよ」

「キンジとゲンが強襲科であたしのパーティーに入ると言うまで」

キンジとアリアが話していた

「もう夜だぞ？」

「何がなんでも入ってもらうわ。私にはもう時間がないの。うんと言わないなら」

もう時間がない？どういうことだ整備終わったし今から調べてみるか…明日にしよっと

「言わねーよ。なら、どうするつもりだ？」

「言わないなら、泊まってくから」ちょっ、本当に神様がいるならこの状況どうにかしてくれよ

「絶対ダメだ！帰れうぇっ」

「そうだキンジの言う通りだ。ここは男子寮だぞ。もしばれたら二人が連れ込んだ。とか言われるだろうが！帰れっ！！」

「出てけ！」この台詞は俺のでもなくキンジのでもなくアリアのだった。

「なんで俺たちが出ていかなくちゃならない！ここはお前の部屋か！」

「分からず屋にはおしおきよ！しばらく戻ってくるな！」面倒くさいから俺は抵抗せずに出てコンビニに行った

俺が何をしてこうなったんだよ。これも全てこの眼のせいだ。この呪われている眼の……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1976z/

緋弾のアリア～呪われた眼を持つ者～

2011年12月11日01時00分発行